

Breeding Process and Characteristics of Camellia Norin No.4 'Himenoka' by Interspecific Hybridization between Camellia japonica and C. lutchuensis

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 道夫, 間, 竜太郎, 岸本, 早苗, 谷川, 奈津, 小野崎, 隆, 家弓, 實行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24514/00001408

原著論文

ツバキとヒメサザンカとの種間交雑によるつばき農林4号
‘姫の香’の育成経過とその特性[†]

柴田道夫・間竜太郎・岸本早苗・
谷川奈津・小野崎隆・家弓實行*

(平成16年6月17日受理)

Breeding Process and Characteristics of Camellia Norin No.4 'Himenoka'
by Interspecific Hybridization between *Camellia japonica* and *C. lutchuensis*

Michio SHIBATA, Ryutaro AIDA, Sanae KISHIMOTO, Natsu TANIKAWA,
Takashi ONOZAKI and Saneyuki KAYUMI

Summary

In order to breed a new, fragrant miniature camellia cultivar, we conducted interspecific hybridization between *Camellia japonica* L. and *C. lutchuensis* Ito. We crossed 581 flowers of *C. japonica* with *C. lutchuensis* in 1990. Five interspecific hybrid seedlings were selected for planting in an open field in 1993, and their characteristics were investigated to guide subsequent selection. One seedling derived from the cross between *C. japonica* 'Komomiji' and *C. lutchuensis* was finally selected in 1998 and was registered as Camellia Norin No. 4 'Himenoka' in 2003. The flowers of 'Himenoka' emit considerable amounts of fragrance, as is the case for *C. lutchuensis*. The pattern of flower color in 'Himenoka' is striated-speckled, with purplish-pink on a pinkish-white ground. This is the first hybrid with speckled flower color that has been observed in this particular cross. Flower diameter is approximately 5 cm, and the number of petals averages 6. The natural flowering time of 'Himenoka' is between the end of February and mid-March in Mie Prefecture. 'Himenoka' is easily propagated by means of cuttings, and grows vigorously.

Key Words: ツバキ, ヒメサザンカ, 種間雑種, 芳香性, 絞り, 冬～春咲き

[†] 本研究の一部は、平成16年度園芸学会春季大会で発表した。

* 元野菜・茶業試験場久留米支場

1. 緒言

わが国に自生するツバキ属 (*Camellia* L.) 植物としては、*Camellia* 節に分類されるヤブツバキ (*Camellia japonica* var. *japonica* L.) およびユキツバキ (*C. japonica* subsp. *rusticana* (Honda) Kitamura) や *Paracamellia* 節に分類されるサザンカ (*C. sasanqua* Thunb.) がよく知られている。これらは、サクラとともに古くから日本人に親しまれ、江戸時代に既に数多くの園芸品種が成立している (萩屋・箱田, 1985)。一方、ツバキ属ではあるものの、ヤブツバキやサザンカとは分類学的に遠縁の *Theopsis* 節に属するヒメサザンカ (*C. lutchuensis* Ito) が南西諸島に自生している (箱田・足立, 1985)。ヒメサザンカの花は、白色一重で花径 2~2.5cm の極小輪と目立たないものの、ツバキ属植物の中で最も強い芳香を有することから、芳香性ツバキ作出のための育種素材として利用されてきた (安藤, 1983・1985; 箱田・足立, 1985; 萩屋, 1990)。主たる香气成分はフェニルエチルアルコールで、ウメ様の香りにヒアシンス様の新鮮なグリーンノートが加わった香りを発散する (小又ら, 1989)。ヒメサザンカの育種の利用は 1960 年代にアメリカで始まり、ヤブツバキおよびユキツバキとの雑種が Ackerman によって、サルウィンツバキ (*C. saluenensis* Stapf ex Bean) との雑種が Cutter によって、それぞれ初めて育成されている (Ackerman, 1971; 安藤, 1983; 萩屋, 1990; Woodroof ed., 1990)。これらの雑種品種は芳香性はあるものの小輪で目立たないことから、海外ではそれほど注目されず、むしろ、わが国に導入されてから評価されるようになった (安藤, 1983; 萩屋, 1990)。その後、わが国でも育種が開始され、ツバキ品種とヒメサザンカとの種間交雑による品種が育成されてきている (萩屋, 1986; 日本ツバキ・サザンカ名鑑編集委員会, 1998)。

農林水産省野菜・茶業試験場 (以下、野菜茶試) 久留米支場緑化植物研究室 (1991 年に野菜茶試花き部: 現独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構花き研究所に移設) では、新しいツバキ品種の育成を目標に 1989 年より種間交雑育種を開始した。その一環として、芳香性で冬咲きであるなど、鉢物用に適するツバキとヒメサザンカとの種間交雑に着目し、1990 年に交雑試験を開始した。このほど育種目標に近く、かつこの交雑では初めての絞り花色を有する品種を育成し、2003 年 8 月に農林水産省育成品種、つばき農林 4 号 '姫の香' (以

下 '姫の香') として登録したので、ここにその育成経過、品種特性を取りまとめて報告する。

本品種の系統適応性検定に当たり、埼玉県農業総合研究センター園芸研究所、九州沖縄農業研究センターの担当研究員各位の協力を得た。また、本品種の交配に当たり永留明子氏に協力を得た。さらに、野菜茶試 (枕崎) の板元利男氏をはじめ、野菜茶試 (枕崎および安濃) の業務科職員の方々には本品種の育成に関して、多大なる協力を得た。ここに記して御礼申し上げる。

本品種の育成については、家弓は 1990 年に、柴田は 1990~2003 年まで、間は 1991~2000 年まで、岸本は 1996~2000 年まで、谷川、小野崎は 2001~2003 年まで、それぞれ担当した。

2. 育成経過

1) 育成経過

1990 年春に野菜茶試久留米支場茶樹育種研究室 (鹿児島県枕崎市) で保存中のツバキ 42 品種とヒメサザンカ (保存番号 1118, 第 1 図) との交雑を行った。ヒメサザンカは染色体数 $2n = 30$ の二倍体である (箱田・足立, 1985)。交雑は開花直前のヤブツバキのつぼみを解剖バサミで切開・除雄後に、花粉を柱頭に授粉する方法で行った。他の花粉による交雑を防ぐために袋かけを行った。合計で 581 花の交配を行った (第 1 表)。朔果が直径数 cm 程度に肥大した 1990 年 6 月に結果率を調査した。結果率は、種子親に用いた品種で大きく異なり、'小紅葉' (第 2 図) 以下 7 品種を種子親に用いた場合のみ結果した (第 1 表)。種子が成熟した同年 8 月に 26 粒を採種し、同年 11 月に播種した。発芽した 12 株を 1991 年の春に黒ボク土を入れた 9cm 黒ビニルポットに鉢上げし養成した。1993 年 9 月に野菜茶試 (三重県安芸郡安濃町) の圃場に定植した。一部の個体が開花し始めた 1995 年春から特性調査を実施した。形態から判断して雑種と思われた 5 個体を選抜した (第 2 表)。

得られた種間雑種 5 個体の中で、ヒメサザンカ由来の芳香性を有し、これまでのツバキとヒメサザンカ交配にはない絞り花色のものが 3 個体認められたが、一重咲きで安定した絞り花色を示し、かつ旺盛な生育を示した 1 個体 (系統番号 1-13) を 1998 年に最終選抜し、系統名 'ツバキ安濃 4 号' を付与した。3 年間にわたる系統適応性検定試験の結果、'ツバキ安濃 4 号' は芳香性と絞り花色などに新規性が認められ、しかも、強健な生



第1図 花粉親 ヒメサザンカ
(左上：花の拡大、保存番号 1118)



第2図 種子親 ツバキ‘小紅葉’

第1表. ツバキ品種とヒメサザンカとの交雑における結果率（枕崎市、1989～1990）

ツバキ品種	結果数／交配数（結果率％）	ツバキ品種	結果数／交配数（結果率％）
熊坂	0/24（0.0）	孔子	0/4（0.0）
花橘	0/26（0.0）	瑞祥	0/3（0.0）
大虹	0/4（0.0）	月光	0/23（0.0）
君が代	0/12（0.0）	村娘	0/13（0.0）
小紅葉	3/26（11.5）*	雪月花	0/4（0.0）
天の川	0/7（0.0）	霊鑑寺白牡丹	0/3（0.0）
草紙洗	0/23（0.0）	連城の玉	0/31（0.0）
藻汐	1/30（3.3）	窓の月	0/4（0.0）
羽衣	3/20（15.0）	春の月	0/2（0.0）
白唐子	0/5（0.0）	綾錦	0/2（0.0）
雪見車	0/9（0.0）	春本波	0/10（0.0）
覆輪一休	1/9（11.1）	和歌の浦	1/32（3.1）
三浦乙女	0/13（0.0）	加茂本阿弥	0/5（0.0）
花見車	0/3（0.0）	呼子鳥	0/2（0.0）
鈴鹿山	0/31（0.0）	初瀬山	0/22（0.0）
蝶の花形	0/3（0.0）	散椿	0/15（0.0）
緋縮緬	0/7（0.0）	寒椿系	0/21（0.0）
フランス白	0/6（0.0）	花車	0/37（0.0）
聚楽	1/18（5.6）	拔筆	0/2（0.0）
松笠	0/31（0.0）	光明	0/12（0.0）
紺佐助	0/4（0.0）	紅牡丹	1/23（4.3）

* つばき農林4号‘姫の香’の得られた組み合わせ

第2表. ツバキとヒメサザンカとの交雑による種間雑種

交配組合せ		種子数	発芽数	最終獲得雑種数
小紅葉	ヒメサザンカ	12	6	4*
聚楽	ヒメサザンカ	1	1	0
羽衣	ヒメサザンカ	3	2	0
和歌の浦	ヒメサザンカ	8	2	1
紅牡丹	ヒメサザンカ	2	1	0

* つばき農林4号‘姫の香’の得られた組み合わせ

育特性が認められたことから、新しい鉢物用ツバキとして有望と判定された。2003年8月につばき農林4号‘姫の香’として命名登録された。

用いられたヒメサザンカは1970年ころにオーストラリア経由で導入されている(箱田, 1987)。おそらく本系統も海外を経由して導入されたものと推察される。

2) 交配親

‘姫の香’(第3図)は、1990年にツバキ品種‘小紅葉’(第2図)を種子親に、ヒメサザンカ(第1図)を花粉親として交雑して育成された品種である。

(1) 種子親, ツバキ ‘小紅葉’

1879年の伊藤「椿花集」に記載がある古典品種。品種‘覆輪一休’は本品種の枝変わりとされる。白～桃地に紅の縦しぼりの入る八重咲き、中輪の花を4月に咲かせる(日本ツバキ・サザンカ名鑑編集委員会, 1998)。

(2) 花粉親, ヒメサザンカ(保存番号1118)

野菜茶試久留米支場(枕崎)で収集保存していた系統である。南西諸島に自生する植物ではあるものの、沖縄の本土復帰以前に海外に渡り、アメリカで育種的な利用がなされている。それ故、国内で最初に育種素材として

3. 品種特性

1) 生育・開花特性

2000～2002年の3カ年にわたり、‘姫の香’の系統適応性検定試験を、埼玉県農業総合研究センター園芸支所(埼玉県久喜市)、九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部(福岡県久留米市)、育成地である花き研究所生理遺伝部(三重県安濃町)の3カ所で実施した。埼玉農総研および九農研セでは、対照品種を‘港の曙’(第4図)として挿し木および接ぎ木苗を毎年3～6株供試し、無加温ガラス室で栽培管理した。また、育成地では露地栽培の株における開花特性を調査した。なお、対照品種の‘港の曙’は、村田祇臣氏が種子親をツバキ品種



第3図 つばき農林4号‘姫の香’の花



第4図 対照品種‘港の曙’の花

‘関東花見車’、花粉親をヒメサザンカとした交雑組み合わせで育成した品種で、現在最も芳香性が強く、広く普及している（安藤ら、2001）ことから選定した。

3カ年の試験における開花特性(第3表)をみると、‘姫の香’は開花始めが埼玉および三重では標準品種よりも早く1～2月であるが、久留米では標準品種よりも遅く3月であった。三重での開花終わりは2000年は4月、2002年は2～3月で標準品種よりも遅く、2001年は3

～4月で標準品種よりも早くなった。花径が5cm程度、花弁数が6枚程度で、淡いピンクあるいは白の地に鮮やかなピンクの縦紋が入る特徴ある花色であった(第3表、第3図)。また、芳香性について、‘港の曙’に匹敵する強さであると判定された。以上のように、姫の香は、対照の‘港の曙’とほぼ同様に、早春に開花し、ヒメサザンカ由来の強い芳香性を有しながらも、対照品種とは全く異なる特徴のある絞り花色を示したことから、新し

第3表 特性調査結果のまとめ(2000～2002)

系統・ 品種名	開花期	花 径	花弁数	花 色*		雄蕊 の形	花糸 の色	子房 の毛	総合**
				花 地色	斑の色				
2000年 (埼玉)	月旬	cm	枚						
姫の香	1上～4上	5.1	6.0	9701	9504	—	白	無	○
港の曙	1中～3中	5.2	5.8	9706	—	—	白	無	
(久留米)									
姫の香	3中	5.5	5.0	49D	51B	—	—	—	—
港の曙	3上～3下	6.0	5.5	56A	—	—	—	—	
(育成地)									
姫の香	1下～4下	5.1	6.0	155D	68B	筒しべ	白	無	○
港の曙	2中～4中	5.2	5.8	68C	—	筒しべ	帯紅	無	
2001年 (埼玉)	月旬	cm	枚						
姫の香	1中～3中	5.0	6.1	9701	9504	—	白	無	○
港の曙	2中～3上	5.9	6.0	9706	—	—	白	無	
(久留米)									
姫の香	3中～3下	5.4	5.0	49D	51B	—	—	—	△
港の曙	2下～3下	5.4	5.6	63D	—	—	—	—	
(育成地)									
姫の香	2中～4上	5.2	6.1	-01	9504	筒しべ	白	無	○
港の曙	2中～4中	5.3	5.9	9706	—	筒しべ	帯紅	無	
2002年 (埼玉)	月旬	cm	枚						
姫の香	12下～2上	4.3	6.6	9701	9504	—	白	無	○
港の曙	1上～1下	4.8	6.5	9706	—	—	白	無	
(久留米)									
姫の香	3上～3中	5.1	6.6	49D	57D	—	—	—	△
港の曙	2下～3上	6.7	5.8	66D	—	—	—	—	
(育成地)									
姫の香	2中～3下	5.0	5.9	9501	9504	筒しべ	白	無	○
港の曙	2中～3中	5.1	5.7	9706	—	筒しべ	帯紅	無	

* 花色：埼玉、育成地（2001～2002年）は日本園芸標準色標、久留米、育成地（2000年）はRHSカラーチャートによる調査結果。

** 判定基準：○) 標準品種より優れる、△) 標準品種と同等、×) 標準品種より劣る。

いツバキ品種としての実用性は高いと判断された。

絞り花色の個体は種子親として絞り花色のツバキ品種‘小紅葉’を用いた場合に得られた。同じく絞り花色であるがツバキ品種‘和歌の浦’との雑種1個体は絞り花色ではなかった。柴田ら(2003)は、ツバキとチャとの種間交雑においても同様の結果を得ていることから、品種‘小紅葉’には絞り花色を高率に遺伝する特性があるものと考えられた。

柴田・間(1994)は、1993年に沖縄におけるヒメサザンカ遺伝資源の探索・収集を行い、その後の特性調査で、‘姫の香’の花粉親系統(保存番号1118)以上に芳香性の高い野生種系統の存在を確認している。これらを育種素材として利用することにより、より芳香性の高い雑種作出が期待される。

2) 自然開花期、葉の特性および新梢の生長特性

露地栽培における自然開花期および生育特性を、安濃圃場に1993年に定植した実生株(‘姫の香’)を供試し、2000年から3年間継続して調査した。対照には同じく1993年に定植した挿し木約10年生の品種‘港の曙’を用いた。1999年には研究室で保存中のヒメサザンカ雑種8品種の自然開花期を調査した。経年調査の結果、‘姫の香’は早い年には1月下旬から遅い時でも2月中旬から開花した(第3表)。また開花終わりに関しては3月下旬から4月上旬あるいは4月下旬であった。2001年を除けば、港の曙よりも長い期間開花していた。1999年の調査で‘姫の香’は‘フラグラントピンク’と同様に、調査した種間雑種品種の中で最も長い自然開花

期を示した(第4表)。

生育特性についてみると、‘姫の香’は1999年の露地における新梢長および展開葉数が‘港の曙’に比べてかなり多く、旺盛な生育を示した(第5表)。葉の大きさや形については、両者の間に大きな相違は認められなかった(第5表)。実生株と挿し木株で前歴が異なること、更に樹齢が異なることから厳密な比較はできないが、‘港の曙’と‘姫の香’は、ともに枝を上方に伸長し、直立性を示す点はほぼ同様であった(第5図)。



第5図. つばき農林4号‘姫の香’の樹姿

第4表. ‘姫の香’およびヒメサザンカ交雑品種の開花期(三重県安濃町、1999)

品種・系統	1月			2月			3月			4月			5月			交雑組み合わせ
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
港の春										○	○	○				紺侘助(J)×L
サルト										○	○	○				S×L
春風				○	○	○	○	○	○	○	○	○				S?×L
風鈴一号										○	○	○				ト伴(J)×L
港の曙				○	○	○	○	○	○	○	○					関東月見車(J)×L
港の桜										○	○					関東月見車(J)×L
軟風										○	○	○	○			S×L
フラグラントピンク				○	○	○	○	○	○	○	○	○				ユキツバキ×L
姫の香				○	○	○	○	○	○	○	○	○				小紅葉(J)×L

J: ヤブツバキ系品種、S: サルウィンツバキ、L: ヒメサザンカ

第5表. ‘姫の香’の露地栽培における生育量および葉長（三重県安濃町、1999）

系統・品種	新梢長	対比	展開葉数	対比	葉身長	葉幅	葉柄長
	cm				cm	cm	cm
姫の香	10.0	164	4.8	133	5.6	2.8	0.5
港の曙	6.1	100	3.6	100	5.9	2.5	0.4

3) 鉢物用としての挿し木発根性および挿し木苗の生育・開花特性

現在、ヒメサザンカ雑種を主とする小型ツバキとしては、つばみ付きの挿し木3年生苗が、主に生産、流通されている。すなわち、ヒメサザンカ交雑品種の適性としては、挿し木繁殖が容易で、生育がよく、挿し木後3年で着らいする特性が望まれる。

1997年と2000年に挿し木発根性試験を行った。新梢が固まった7月上旬以降に挿し木用の枝を母株より採り、葉を2枚着生させた状態で切り戻し調整したのちに数時間水揚げを行い、オキシベロン粉剤（1.0%、塩野義製薬、大阪）を基部に塗布し、寒冷紗で覆ったミスト室内で挿し木した。挿し木用土は、日向土（最も粒の細かいもの）と鹿沼土を2:1の比率で混合したものとし、50×35×10cmの育苗箱に1列5本で6列挿しとした。日中1時間に1分間ミスト灌水を行った。挿し木後、90～100日程度経過した秋に掘り上げて、最長根長、根数を調査した。対照品種として‘港の曙’を用い、1997年には‘春風’、‘フラグラントピンク’、‘立寒椿’も加えて比較した。1系統・品種あたり20～30本を供試した。‘姫の香’は最長根長では‘港の曙’および‘フラグラントピンク’を下回るものの根数では‘港の曙’の2倍以上で、全体として‘姫の香’は高い挿し木繁殖性を有するものと考えられた（第6、7表）。

2000年に育成した挿し木繁殖苗を、その後9cm黒ビ

ニルポットに同様の用土で鉢上げし、ガラス室内で寒冷紗で覆った条件下で養成した。施肥はマグアンプK（大粒、ハイポネックスジャパン、大阪）を適宜施した。鉢上げ後、ほぼ1年および2年を経過した2001年10月下旬および2002年10月下旬に、生育・着らい状況を調査した。‘姫の香’は約100鉢を、対照の‘港の曙’、‘フラグラントピンク’、‘春風’、‘立寒椿’は20鉢を供試した。‘姫の香’は挿し木1および2年生において、‘港の曙’ほか3品種に比べて樹高および主幹葉数の値がかなり大きく、生育が旺盛であることが明らかになった（第8表、第6図）。なお、供試した全品種で、挿し木1～2年生での着らいは認められなかった。1999年に育成し樹高40cm程度となった挿し木3年生株を用いて、スミセブンP剤（住友化学工業、東京）25ppmを用いたわい化剤処理による着らい促進について検討したところ、処理により若干着らい数の増加が認められたが、無処理区でも着らいが認められ、その効果は明らかでなかった（第9表、第7図）。但し、3年生株における着らいが確認できたことから、‘姫の香’は、現在生産されているヒメサザンカ雑種品種と同様に挿し木3年生株での着らい出荷が可能であると考えられた。

以上のように、‘姫の香’は‘港の曙’に比べて自然開花期間がやや長く、早春咲き性を示すこと、かつ‘港の曙’などの品種に比べ、露地および施設下において高い生育特性を示すこと、挿し木繁殖能力が上回るなどの

第6表 ‘姫の香’の挿し木発根性（1997）

品種・系統	最長根長	根数
	cm	本
姫の香	5.5	29.6
港の曙	6.8	9.2
春風	3.5	15.9
フラグラントピンク	8.2	10.7
立寒椿	3.5	4.9

第7表 ‘姫の香’の挿し木発根性（2000）

品種・系統	最長根長	根数
	cm	本
姫の香	5.5	23.3
港の曙	9.1	11.8

第8表. '姫の香' の挿し木1 および2年生苗の生育・着らい状況 (2001～2002)

系統・品種	1年生			2年生		
	樹高	主幹葉数	着らい率	樹高	主幹葉数	着らい率
	cm		%	cm		%
姫の香	7.8	8.3	0.0	9.1	10.2	0.0
港の曙	3.5	3.9	0.0	5.5	7.1	0.0
春風	3.5	4.2	0.0	4.4	4.9	0.0
フラグラントピンク	3.5	4.2	0.0	5.3	5.7	0.0
立寒椿	3.1	3.3	0.0	7.2	7.5	0.0

第9表. '姫の香' のわい化剤処理による挿し木3年生苗の着らい促進 (2003)

処理区	処理時樹高	着らい株率	株あたり平均着らい数 (かっこ内は着らいした 株の平均着らい数)
	cm	%	
スミセブン 25ppm 1回処理	40.3	60.0	1.3 (2.2)
スミセブン 25ppm 2回処理	37.0	50.0	0.7 (1.4)
無処理区	42.3	40.0	0.6 (1.2)

第6図. つばき農林4号 '姫の香' の挿し木1年生株の生育比較
左 '姫の香'、右 'フラグラントピンク'第7図. つばき農林4号 '姫の香' の挿し木3年生苗の
開花 (スミセブン 25ppm 処理株)

優秀性が認められ、さらに挿し木3年生での着らい性が確認されたことなどから、苗木生産用として十分な適性を有するものと考えられた。

なお、品種登録申請用に2002年に三重県安濃町において行った '姫の香' とその類似品種 ('港の曙', 'Salut')

との特性比較について、第10表に示した。

4) 適地および栽培上の留意点

鉢物用のツバキ種間雑種で、全国のツバキ苗生産地における栽培に適すると思われる。絞り花系統の一般的な

第10表. ‘姫の香’ とその類似品種との特性比較 (2002、三重県安濃町)

区 分	形 質	特性値			
		姫の香	港の曙	Salut	
01 植物体	樹形	立性	立性	立性	
	樹高	普通	普通	普通	
02 枝	枝の太さ	中	中	中	
	新枝の毛の有無・多少	微	微	微	
	新梢の毛の持続性	夏に落ちる	夏に落ちる	夏に落ちる	
	分枝性	弱	弱	弱	
	節間長	中	中	中	
03 葉	葉形	長楕円形	長楕円形	長楕円形	
	葉の大きさ	大	大	中	
	葉姿の変化性	変化なし	変化なし	変化なし	
	葉姿の変化性	中折	中折	中折	
	葉の先端の形	鋭突形	鋭突形	鋭突形	
	葉脚の形	鋭脚	鋭脚	鋭脚	
	葉の色	緑	緑	黄緑	
	斑の種類	—	—	—	
	葉の光沢	少	少	少	
	葉の厚さ	中	中	中	
	葉縁の形	細鋸歯	細鋸歯	細鋸歯	
	葉脈の明瞭さ (上面)	半透明	半透明	半透明	
	葉脈の明瞭さ (下面)	半透明	半透明	半透明	
	葉脈の凹凸	凸	凸	凸	
	葉脈の模様	単純	単純	単純	
	葉柄の長さ	中	中	短	
	葉柄及び葉の毛	葉柄に少し	葉柄に少し	葉柄に少し	
	04 花	花形の変化性	少ない	少ない	少ない
		一重・八重別	一重咲き	一重咲き	一重咲き
		一重咲きの花形	ラッパ咲き	ラッパ咲き	ラッパ咲き
八重咲きの花形		—	—	—	
千重咲きの花形		—	—	—	
花の着き方 (向き)		横向き	横向き	横向き	
花の大きさ		極小輪	極小輪	極小輪	
花色区分		複色	単色	単色	
花色 (地色)		JHS カラーチャート: No.9501 色名: 淡紫ピンク	JHS カラーチャート: No.9504 色名: 鮮紫ピンク	JHS カラーチャート: No.9504 色名: 鮮紫ピンク	
内側の花卉の色		—	—	—	
複色花の区分		絞り	—	—	
絞りの区分		縦絞り	—	—	
その他の斑の区分		—	—	—	
斑の色		JHS カラーチャート: No.9704 色名: 鮮紫ピンク	—	—	
外花卉の形		楕円形	倒卵形	丸形	
弁脈	少し有り	明確	少し有り		
弁縁の形	桜弁	桜弁	桜弁		

	花弁数	6枚	5～6枚	5～6枚
	外花弁数	6枚	5～6枚	5～6枚
	内花弁数	－	－	－
	内花弁の形	－	－	－
	外花弁の曲がり方	平滑	波曲	平滑
	花弁の厚さ	薄い	薄い	薄い
	つぼみの形	円突形	円突形	円形
	雄ずいの形	筒しべ	筒しべ	筒しべ・サザンカしべ
	花糸の色	白	帯紅	帯紅
	花糸の色	少	少	少
	やくの色	黄	黄	黄
	花弁と雄ずいのゆ着	する	する	する
	子房の毛	無	無	無
	子房の室数	3室	3室	3室
	雌ずい／雄ずいの長さ	雄ずいと同長	雄ずいと同長	雄ずいと同長
	雌ずいの退化	退化していない	退化していない	退化していない
	つぼみ時の雌ずいの露出	しない	しない	しない
	花柱の分裂数	3	3	3
	花柱の分裂の程度	花頭のみ	花頭のみ	4分の一
	花柱の毛	無	無	無
	花梗の有無及び長さ	短	短	短
	花の香り	強	強	微
05 さく果	さく果の形	－	－	－
	さく果の大きさ	－	－	－
	さく果の厚さ	－	－	－
06 生態的特性	開花期	早春咲き	早春咲き	春咲き
	開花量	中	中	中
	耐寒性	弱	弱	弱
	耐暑性	中	中	中
	病害抵抗性	中	中	中
	虫害抵抗性	中	中	中

特徴として、枝によってはピンク一色の花が偏って咲く場合がある。増殖の際には絞り花色が安定して現れるように留意する必要がある。

5) 品種名の由来

ヒメサザンカの香りをもつ花を咲かせることに由来して、‘姫の香’ (Himenoka) と命名された。

摘 要

1) 芳香性で小輪多花性かつ冬咲き性をもつなど、新しいタイプの鉢物用ツバキの育成を目的として、ツバキとヒメサザンカとの種間交雑を行った。

2) 1990年春に、ツバキ42品種にヒメサザンカを581花交配。1990年8月に26粒採種、発芽後鉢上げし、1993年9月に安濃圃場に5株を定植。1998年に種子親にツバキ園芸品種‘小紅葉’を、花粉親にヒメサザンカ(保存番号1118)を用いた1系統について安濃番号を付し、2000年～2002年にかけて、系適場所等で検定を行った結果、実用品種として有望と判断され、2003年8月につばき農林4号‘姫の香’として命名登録された。

3) ‘姫の香’の花は、ピンク味を帯びた白地にピンクの縦絞りが入る、この種間交雑では初めての絞り花色を示す。

4) ‘姫の香’の花の花径は5cm程度、花弁数は約6枚である。

5) ‘姫の香’の三重県における露地での自然開花期は

2月中旬から3月中旬と長い。冬季加温した施設下では、12月下旬から1月上旬に開花が集中する。

6) ‘姫の香’は挿し木繁殖が容易で、生育が旺盛である。

引用文献

- Ackerman, W.L. 1971. Genetic and cytological studies with *Camellia* and related Genera. Technical Bulletin 1437. U.S. Department of Agriculture. pp115.
- 安藤芳顕. 1983. 小型の雑種ツバキ. 新花卉. 117, 28-31.
- 安藤芳顕. 1985. ツバキ 世界の花木となる. 朝日園芸百科. 20, 113-118.
- 安藤敏夫・小笠原亮・森 弦一. 2001. 日本花名鑑 1. 2001-2002. アボック社. 鎌倉. pp304.
- 萩屋 薫・箱田直紀. 1985. ツバキ. 朝日園芸百科. 14, 44-59.
- 萩屋 薫. 1986. ツバキ属の種間交雑の研究. 西武舞鶴植物研究所報告. 2, 1-24.
- 萩屋 薫. 1990. 期待のミニつばき. ガーデンライフ. 29(2), 15-25.
- 箱田直紀・足立尚義. 1985. ツバキ属の原種－西武舞鶴植物研究所で収集した種を中心として－. 西武舞鶴植物研究所報告. 1, 1-54.
- 箱田直紀. 1987. わが国に導入されたツバキ属の種の来歴について. 西武舞鶴植物研究所報告. 3, 1-10.
- 日本ツバキ・サザンカ名鑑編集委員会. 1998. 日本ツバキ・サザンカ名鑑. p105. 誠文堂新光社. 東京.
- 小又昭彦・蓬田勝之・中村祥二・太田忠男・井澤靖子. 1989. ツバキの花の香気成分に関する研究. 園学雑. 58, 429-434.
- 柴田道夫・間竜太郎. 1994. 南西諸島地域における芳香性野生ツバキ属の収集. 植物遺伝資源探索導入調査報告書. 10, 41～52.
- 柴田道夫・間竜太郎・岸本早苗・谷川奈津・小野崎隆・家弓実行. 2003. ツバキとチャとの種間交雑によるつばき農林1号‘春待姫’の育成経過とその特性. 花き研報. 3, 1-10.
- Woodroof, W. E. ed. 1990. *Camellia Nomenclature*. The Southern California Camellia Society, Inc. Arcadia. pp174.